

氏 名	おおにし くに たろう 大 西 國 太 郎
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 乙 第 30 号
学位授与の日付	平成 7 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	中国・西安市における都市景観の形成・誘導と歴史的地域の保存再生に関する研究 —日本・京都との比較分析も含めて—
審 査 委 員	(主査) 教 授 材 野 博 司 教 授 池 田 有 隣 教 授 古 山 正 雄 教 授 日 向 進

論 文 内 容 の 要 旨

中国の歴史都市においては、近代化と開発への強い指向により、都市の環境が大きく変貌しつつあり、利便性や経済性と引きかえに、伝統的な都市住居「四合院」やその町並みは重大な危機に瀕しているがために、その保全を前提とした景観対策を探ることは重要な今日的課題と言える。

そこで、本研究では、中国の代表的な歴史都市、西安市の景観問題を研究対象として選定し、都市全体の景観のあるべき方向を探るとともに、歴史的地区の景観の保全再生の諸方策を検討し、日本の歴史都市を代表する「京都」との比較を通して、西安市における景観対策のあるべき方向を探ろうとするものである。

本論文は、序論・前章とⅠ部、Ⅱ部の本論および終章からなり、前章では中国の都市計画の動向と中国都市全体の景観関連施策の実態について論じている。

第Ⅰ部では、西安市における景観形成の変容と誘導に関する調査検討を行い、西安市の諸課題が中国の歴史都市に共通する課題であることを確かめている。

次に、町並み景観を構成する四合院門房の保存・改善状況の実態を調査・分析し、四合院門房群の保存が開発に対して町並み景観全体の保全に有効に働いていることを検証している。

第Ⅱ部においては、このような歴史的町並みの保存と住環境の改善を両立させる手法を探るために、歴史的地区を代表し、かつ、四合院民居の多い福德港地区においてケーススタディを行い、伝統的民居内の住環境と門房外観の変化の2側面に関連させて検討しつつ、修復的整備の方向を提示している。まず、四合院門房の保存度と門房外観の変化要因の関係について検討し、補修型から住環境改善型、用途変更型へ移るほど保存度が下がっていることを明らかにするとともに、四合院門房の保存によって、背後敷地の住環境改善をある程度進めても、景観安全性が確保できることを明らかにするなど多くの知見を得ている。

さらに、終章においては、これら西安市における研究成果をベースに、京都の歴史的景観変容との比較を通して、両市が抱える景観課題の共通性と相違性を浮き彫りにしつつ、西安市の都市景観のあるべき方向を提示している。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、中国の歴史都市に関する研究では、最も欠けていた景観保全と市街地再編成に関する研究であり、特に現地での本格的実態調査を伴うものとしては、中国全体でも初めてのものであって、先進性と独自性において、高く評価される。要旨の冒頭にも記した如く、開発への指向性を強めつつある中国の都

市において、歴史的景観を保全しつつ、住環境の改善整備を誘導することは緊急の課題であり、高度経済の急成長を終え、成熟期にある日本の研究者の目から調査研究し、提案を行うことの今日的意義は大である。

次に、本研究の主題は景観に関するものではあっても、都市の景観を単独的に取り扱うものではなく、景観の課題解決に密接に関連する住環境空間の調査分析と併存させている点が又、特長である。

さらに、日中の代表的歴史都市、京都・西安両市の特性と景観課題の比較研究を行い、わが国の景観計画が果たしてきた役割とその限界を確かめた上で、本研究の成果を総合し、西安市における都市景観計画のあるべき方向を提案している点は本研究の今一つの特長である。

中心をなす論文は、第Ⅰ部第2章・第Ⅱ部第2章、第3章・終章であるが、それは、日本都市計画学会学術論文にⅠ編、日本都市計画学会一般研究論文「都市計画」にⅠ編、日本建築学会「建築雑誌」にⅠ編報告済みである。

以上により、審査委員会は本論文が学位授与に充分値すると判断した。